

## 柴田実先生を悼む



京都大学名誉教授、史学研究会顧問柴田実先生は、去る平成九年三月十六日、肺炎のため、京都市内の病院で逝去された。享年九十一歳。ここに謹んで哀悼の意を捧げる。

先生は石門心学の正統を伝える柴田鳩翁の曾孫として、明治三十九年一月十一日、京都市下京区五条通東洞院の修正舎にお生まれになり、四歳のとき、中京区新町通二条上ルの明倫舎に転居され、終生そこで過ごされた。幼少のときから俊才をうたわれたが、第三高等学校を経て、昭和五年三月、京都帝国大学文学部を卒業、卒業と同時に文学部助手、七年には助手、十一年には講師、二十一年には助教教授に就任された。新制京都大学の発足に伴い、二十五年四月、京都大学分校（のち教養部）教授に転じられた。三十八年四月には教養部制が官制化されたが、先生は同年六月、教養部長に選任され、その後二年にわたり、よく大学の管理運営の重職を全うされた。四十四年三月には、停年によって京都大学を退官され、四月にはこれまで多年にわたる教育、研究上の御功績に対して、京都大学名誉教授の称号が贈られた。また五十一年十一月には、勲二等瑞宝章が授与された。なお京都大学退官後も、四十四年四月から五十一年三月までは関西大学文学部教授、五十一年四月から六十二年三月までは仏教大学文学部教授として後進の指導に当たられた。

この間、文部省学術奨励審議会委員、同学術審議会専門委員、史学研究会理事、日本風俗史学会理事、同関西支部長、黒川古文化研究所理事、滋賀県、兵庫県、京都府、大阪府などの文化財専

門委員、京都国立博物館評議会評議員などに就任し、学術の発展、文化財の調査、保護などに多大の貢献をなされた。

先生の研究業績としては、何よりも庶民信仰史に関する研究が挙げられる。『中世庶民信仰の研究』『日本庶民信仰史』（民俗篇、仏教篇、神道篇）がその代表的著作である。「歴史を通して今なお常民の間に伝えられ、生きているところの神仏の信仰の中にこそ、日本文化の原質ともいふべきものが見いださるべきではないか」と述べておられるように、著名な宗教家の思想などよりも、常民の信仰の中に、日本文化の原質を求めようとするのであり、そのために文献史学のみならず、民俗学の方法を積極的にとり入れておられる。

今一つの大きな柱は石門心学の研究である。心学は先生にとつては家学であり、修正舎・明倫舎などの講舎において、みずから心学道話をも実践されていた。この分野では『心学』『石田梅岩』『梅岩とその門流』などを著されるとともに、『石門心学』（『日本思想大系』42）『石田梅岩全集』（上・下）『手島堵庵全集』『鳩翁道話』など、心学研究の基本的文献の復刻、校注などを行っておられる。

『大津京趾』（上・下）は、先生の初期の御研究として著名であり、崇福寺塔跡から黄金舍利容器を発見するなど、大津京跡の研究に重要な指針を与えられた。その後も先生は京都市、泉佐野市、水口町、三木市、摂津市などの委嘱を受け、市史・町史の編纂に従事され、指導的な役割を果たされた。そして文献史料のみ

ならず、遺跡の発掘調査、民俗資料調査でも成果を挙げておられる。

『古代国家の展開』（『京大日本史』2）や『王朝文化』（『国民の歴史』6）は、先生自身、「すて難い愛惜を有する」と述べておられるが、透徹した史眼と流麗な文章で綴られており、ユニークで洗練された歴史叙述である。

これまで述べて来ただけでも、先生の研究が実に多くの時代と分野にわたっていることがわかるであろう。しかし私にはこのように著書を書き連ねただけで、先生の学問を語り尽くせるとは思えない。京都大学文学部の演習で、私は延喜民部省式を教えていただいた。教養部では毎年史学概論を講義しておられ、たまたま外遊されたため、私は代講を仰せつかって閉口した。その外遊だが、世界宗教会議（マニラ）・世界宗教国際会議（ヴェネチア）に招かれ、神道について講演された。日欧のフェューダリズムの比較には深い関心を持ち、学生を相手に洋書の輪読をやっておられた。私が直接接しただけでも、先生の関心はこれほど広いのである。種々の会合の折の先生のスピーチからは、古今東西にわたる深い含著が窺い知られた。みずから「雑学」と謙遜されるが、学問の幅の広さにおいて、先生の右に出る人は稀であろう。まことに卓越した教養人であられた。

先生は恩師である西田直二郎博士を深く景仰し、『日本文化史序説』をはじめとする博士の論著の復刊、紹介に尽力されたが、ここに述べた柴田先生の学風は、西田博士を髣髴させるものがある。

る。先生は西田文化史学を正しく継承し、発展させられたといえよう。

先生は温厚である一方、毅然として筋を通し、伝統を重んじる一方、柔軟な考え方をされ、進取の気性に富んでおられた。謹厳であるとともに暖かいお人柄であり、高潔な人格者として尊敬を集められた。

晩年は御健康に恵まれます、病臥がちでお気の毒であった。そして御家族の献身的な看病にもかかわらず、遂に長逝された。心から御冥福をお祈り申し上げます。

(上横手 雅敬 記)